

日本精神と仏教

一。今日この頃、特に支那事変が勃発してから「日本には、日本精神というものがあ
り、日本固有の精神がある。その上に更に仏教などというものは不要ではないか。」
という理屈をよく聞かされます。そしてそれはいわゆる知識階級の人から聞かされ
ます。

勇敢なるある小学校校長は「日本精神とは南無阿弥陀仏を称えていることではない
ぞ！」と血相変えて怒鳴つたそうであります。そうした声を、何と考え、何と受け取
るべきでありましょうか。

一。私どもは、今から十年くらい前には、一切の都会と言う都会でほとんどの学生、
知識階級から、社会主義のことばかり聞かされました。そしてそれらの人から、何と
かして私を左に転ぜさせよう、一貫の道向きを変えさせようと、働きかけられ、果
ては濟度すべからざる奴として、随分ひどい罵倒を受けたものであります。やれ時代
遅れだの、無用の長物だの、認識不足だの、逆立だの、阿片だのとやられました。が、
「夫れ真実の教を躰さば則ち大無量寿経是れなり」との聖人の第一提言が魂の中にく
い入つていて、それを打ち砕いていただくほどのことがなかつたのであります。そし
て今日はその左が右に向きを変えました。

近頃になると、誰も彼も日本精神になつて、我こそ日本精神の真髓を把握したよう
な言いふりで再び打たれることあります。左から打たれたものが今度は右から打た
れます。しかも無宗教であることは同一であります。果してこの風潮を信じきる
ことが出来ましょうか。真実の総親和がそこから生れましょうか。

大御心に、日本建国の精神に、真に合一してあるではありませんか。

一。右翼と言われる人々の中にも、ずいぶん偏狭な組と、広い心の人とあるようであ
りますが、偏狭な人になると、日本精神とは他の一切を排撃すること、というような
印象を与えるほど、排他的であるようであります。すなわち、仏教などたたきつぶし
たところに日本精神がある、というような風な考え方があります。

一。しかるに、五箇条ノ御誓文には「智識ヲ世界ニ求メ 大ニ皇基ヲ振起スベシ」と
仰せられました。これ即ち、明治大帝の大御心であり、日本建国の精神であらねばな
りません。

支那、小アジア、印度、ギリシヤ等は、世界文化の発生地であります。しかるに現
代の治乱興亡は皆の知るが如くであります。でありますから、文化の発生地必ずしも
栄えるのではない。これを受け取つて、よく国土民族の中に融したものが偉大なる発
展をとげるのであります。そしてそのことは決して国家の恥辱ではありません。今
現に使っているこの文字すら、大和民族が造つたものでなくて、支那から移入したも
のであります。いかなる偏狭なる人間も文字まで海に棄てようとは言いませんまい。

日本は、文化の発生地として偉大であるのではなくて、文化の消費者、統融者、創造発展において偉大なのであります。しかも、かゝる偉大こそ、本来民族の中に流れている日本魂でなくてはなりません。一切を排撃して偉大なのではなくして、一切を摂取するが故に偉大なのであります。

一。日本文化の先駆者は聖徳太子であります。これは何人といえども肯定せねばいられないことでもあります。政治、法律、制度、外交、経済、学術、工芸、美術、宗教、等々は一切推古朝においてその根本の礎がおかれたと言っているのではありません。

太子こそは、身を以て国民がいかに天皇に尽くすべきかを示したまい、内憂外患の秋、日本の進むべき道を示したまい、祭政一致の精神を明澄し、仏教を信奉して、いわゆる『三経義疏』を御製作遊ばされました。これがはじめて日本の国より生れたる精神文化として大陸に逆輸入されたのであります。

一。聖徳太子の御功績は、長らくの間、その正しい御相がかくされてありました。しかし正しいものはいかに草に埋れているようでも、必ず仰がれる日が来るのであります。今日、日本精神を忠実に史的発展の上に求めんとするもの、一片の感情、怪気炎によらずして、その正しい相を求めるものは、何人も太子の偉大の上にまず求めねばならないのであります。しかるに太子と仏教とは、これを決して分かつことが出来ないことを知らねばなりません。爾来一千有余年、仏教が国体にもとるか否か、試験済のことでもあります。

ある中等学校の先生は「仏教は国体にもとりはしませんか！」ときめつけました。まさか、御年十九歳より四十九歳まで、皇太子にして摂政にましました聖徳太子を日本精神にもとるお方もいえますまい。一寸考えたらすぐわかることでもあります。専門教育を受けた中等学校の先生までがこれだとは情ないことでもあります。

一。「日域大乘相應地」と言われます。善いにせよ悪いにせよ、文化というものは、それに相應した地において発展するものであります。仏教は、印度に興り、支那に育ちましたが、真に大繁茂したのは日本であります。これ国土の徳であります。

日本の過去において聖者たちは、「日本の心」を以て仏教を受け取ったのであります。ある人は、仏教の悪い所を捨て、これを改造して日本に入れたように言いますが、現に教科書などの編集者の中にかかることを言っているものもあるのであります。そうではない。仏法は血脈相承を重んじます。決して屈まけることを許さない。

そうではなくして「日本の心」を以て受け取ったのであり、仏教は、日本民族、日本国土の内奥に流れている、如来、大勢至の智慧、観世音の慈悲など、そうした潜在的なものを引き出したのであります。この日本の内奥に、建国の原始からあつた尊いものを引き出したのであります。それが日本国土に誕生した多くの聖者であり、国民への感化であります。国土の如来が、自然に法爾に、顕現したのであります。日本の如来が日本に現われたのであります。

一。でありますから、仏教は教化であつて、一つの単なる形色や、権力や、常一主宰神などの輸入ではないのであります。南無阿弥陀仏、即ち無量寿、無量光、いのちとひかりは、誰の魂の上にも誕生して下さる文化的事実であります。自覚の本質であります。即ち、それ自体の真実の發揮であります。

一。仏教とは、教、行、信、証であります。教とは真実教、行とは、自覚の先験的実在、信とは自覚、証とは人格の完成であります。しかして、無我の精神をその基調とするのであります。

一。日本精神とは忠孝一致の精神であります。

日々教壇に立つて人を教えつつ、いまだ親の前には一度も頭が下つていない。忠義を説きつつ名利のために追ひ使われる。日本精神を我がもの顔に、簡単に勇敢に振舞ふ前に、まず静かに自己の胸に手を置いて内省自粛いたしましょう。

はたして、大君の前に、親の前に頭を真に下げているではありませんか。かく書いている私のごとき愚人は、お恥しいことながら、仏法を知らず、お念仏の申されぬ間は、頭が下つていないということさえ知らずに、日本国土を名利我慢、不平愚痴、勝手享樂の泥足のままで蹂躪していたのであります。ほのかに真実教が親鸞聖人のみ声を通してこの心に満入し、大慈悲の前に頭を下げた時、そこに、永遠に幸福であつた私と、恐るべき私が現れ、光と尊さに満ちた、皇国日本が合掌稽首したところに広がっていました。ありがたいみ国に生れさせて頂いたものであります。

3

一。日本精神とは、忠と孝の行ぜられている所に流れているのであります。いかに忠に見えても孝でなく、いかに孝に見えても忠でないものは日本精神ではない。忠孝一致のところには日本精神はあります。日本精神の理論をふりまわす所にあるのではなくて、大御心を頂くとところにあるのであります。

一。私は、日本精神を説く人の中に、親不孝者は見ましたが、真に念仏する人に、未だかつて一人も親不孝者を見たことがありません。私は特に「真に念仏する人」と真の字を加えておきます。

一。下らない頭は何の前にも下らない。下らないのは、心の底に我慢があるからであります。この我こそ万悪の根元であります。「仏法は無我にて候」真実の教、即ち大慈悲によつてのみ、この我は融けることあります。

一。しかし仏教が軽蔑されることについては反省しなくてはならぬ沢山なものがあります。外ばかりが仏法であり、仏教によつて衣食しつつも、百人中一人も真実念仏する人がなく、その形骸の中に立こもつて、名利や権勢を求め、仏教を知らざる人よりもあさましい墮落の相を曝露して来たことなどが、これであります。これはまことに申しわけのないことであります。親鸞聖人の語を以つて言えば、

「仏法を破る人なし、仏法者の破るにたとへたるには、『師子の身中の虫の師子をくらふが如し』と候へば、念仏者をば仏法者の破り得げ候ふなり。よくよく心得たもうべし。」（御消息集）

であります。頂戴いたすべきであります。仏法とは家が寺が仏法であつて、その家中に一人も仏の光に光つたものがない。一ヶ村数ヶ寺の寺が一ヶ寺も一村一郷の光とさえならぬ。こうしたことが仏法を軽んぜしめる唯一の因となつたのであります。

一。皇国精神の偉大であることを仰ぐことにおいて、あえて人後に落ちるものではありませんが、しかしそれは、素朴的な、排他的な、狭量な心で、他の一切を侮蔑し、排斥する所に出て来る偉大ではなくて、他の一切を、広い心に摂取するところに顕れて来る偉大であります。

一。他から摂取すべからざるものが押し寄せて来た場合には、それは必ず、思想の形、文化の形となつて入つて来ます。その思想に対するには思想を以てするより外に、これを防ぎ、あるいは滅し、あるいは消化することは出来ずまい。偉大なる民族は、偉大なる思想文化の持ち主であります。しかして、東洋には東洋の、日本には日本の偉大なる思想文化があります。仏教こそは、東洋が、特に日本が持つ所の世界最高の文化であります。

一。明治の初め、西洋文明の輸入に急にして、西洋のものは何でもこれを盲信盲尊するといふ風になりました。舶来というものは何でもよく、演説をする人でも、必ず、エマーソンいわく、カントいわく、と言わなくては偉くない。また聞く方は、そうした西洋人の名が出ると、その言葉が動かすべからざる大前提となり、命題となつて、大変えらい語の気がする、といった風になりました。

一。特に明治初年には、例の廢仏毀釈というまちがつたことが為政者によつてなされて、いよく国内にあるものを軽蔑し、宗教を棄てて、人間を動物本能の野に開放し、それに、自我的な、主我的な西洋思想をとり入れました。こうした大きなまちがいは、長く国家がその結果を刈り取らねばならぬことになりました。

一。糊と鉄で綴つた西洋思想、それを説くのが学者である、日本のほんとうの心を説く人はない。日本のもの、自分のものを説く人はない。日本にあるものはこれを疑い、これを馬鹿めて、一も二も西洋のものが尊い。こうして日本の大地の奥のものは覆われ、日本のものは失われて来たのであります。

一。正しい宗教的教養を失つた国は哀れであります。人にして正信なくば必ず邪信迷信の世界に入ります。仏教を侮蔑し、文化的教養において何ら得る所のなかつた国民は、現代において惨憺たる醜状を白日下に曝しました。一文不知の人ならまだしも、いわゆる知識階級が、やれ人の道、やれ大本教、やれ何と、淫祠邪教の世界に走つ

て、インチキ師の為に躍らされました。しかして法網にふれぬだけで、今日だって同じことでもあります。非常に功利的な考え方、御利益本位の迷信が、国民の多数を支配するということは、国力発展の上にも大きな障害を来すところの亡国的疾患なのであります。

一。国民の魂の中にある我執、迷情、不安などは、必ずこれを神または仏の上に反映せしめて、これを神仏の上に見て拝もうとするのであります。同じ人丸神社が、一つは明石に、一つは島根の高津にあるが、一つは「火止る」で火難除けの神となり、一つは「人生る」で安産の神様となるが如き、人間の心の投影にすぎません。明治神官の御守札が、賭博輩の間に勝神様として大事がられると聞きますが、これなんか、まことに沙汰の限りであります。人は正しい教養を受けなければ、まことに如何とも出来ないことでもあります。汚物があれば蠅が五月蠅くわくように、湿気があればバクテリアが発生するように、人間の世界に迷信のなくなることはありません。でありとすれば、そして正信に導くより外に道がないとすれば、宗教的文化的教育ほど大切なことはないことが知られることであります。

一。素朴的な日本主義者の中には、神社に祈願していさえすれば、それで立派な銃後赤誠の人、神社に祈願しないような人は、不忠者というように簡単に考えている人があるようであります。しかしそれは大変な疑わしいことであります。

あるところに事変が始つて、一人息子が出征した家がありました。その両親は、それから毎朝暗い中から起きて神社に日参の祈祷をはじめました。その神様は、金枝玉葉の御身で、み国の為に戦地に御病氣にて薨去遊ばされた方をお祭りした神社であります。しかるにその神前に、我が子が戦死せぬようにと祈つておりました。それを、これもまた一人子を戦に出した親一人子一人の老母に語つて、「貴女は祈願せぬか。」と問いました。老母は「息子はみ国に捧げたのです。今さら何をお願いしましょう。お参りしたところで、息子が死んでも続きますまいし、無事で帰つても続きますまい。続かぬことをするより、私は毎日続く分をさせて頂きましょう。」と言いました。この老母はありがたい念仏の行者であつて、たった一人の留守も少しも淋しがつていませんし、その息子は、部隊中での褒者で幾度もく、決死隊に加わり抜群の功を建て、母の心にそうことが出来ないのが残念です。」と言つていたそうであります。神に参るものは忠義、でないものは不忠とは言えません。

一。日本の国は、ありがたい国であります。無条件にありがたい国であります。よくもまあこうしたありがたいみ国に生れさせて頂いたことでもあります。これは日本国民のすべてが持つ心であります。この無条件に湧いて来るところの感謝の情が、日本国民の生活の根本基調となるのであります。もし万一日本国土に生をうけつゝも、この「ありがたいございます」という感謝の心を持たないならば、滅私奉公ということ、事実において成就すべくもありません。これは心が盲いたる為、国のほんとうの相を見ることが出来ないからであります。

一。仏教は、つづまるところ、親鸞聖人のいわゆる「信」の一字につきることでありませんが、信とは何であるか、曰く「信心の智慧」であります。信心の智慧とは、内に開く眼であります。智慧のない相、すなわち無明が眼無き人の相であれば、信心の智慧とは内に眼を開いて頂いたことであります。教えによつて内に開眼の手術を受けた人であります。

この内に開いた眼とは、無量寿のいのちに向つて開いた眼であります。言いかえると絶対の徳への開眼であります。

一。無量寿のいのちによつて生かされる、それが信心の智慧、すなわち、まことの自覚の相であります。量り知ることの出来ないのち、久遠の御いのちに摂取されて生きる、それはまた無限に内に満されて生きることでもあります。この内に無限に満され、智慧の光によつて無明の黒闇を引き破つて頂いたところに、はじめて本当に衷心から「ありがとうございます」という、感謝の情は湧いて来るのであります。

一。智慧光に照されて、魂の奥底の暗を破つて頂かねば、愚痴の心を離れることは出来ません。又無量寿のいのちによつて、内に満されることなくしては、愚痴の心を離れることは出来ません。愚痴の心を離れることが出来ないで、「ありがとうございます」と、心から感謝の心を持つことは出来ません。

一。信心の智慧は、かくして、内に満された心であり、闇を破られた心であります。それ故に、無限の感謝に満ちた心であります。この開かれた眼こそは、同時に一切のものを正しく見る眼でなくてはなりません。日本の国の尊さも、ありがたさも、ここに拝まれてくるのであります。もし愚痴の暗い心のままでいるならば、それが引いて、周囲を暗くし、家庭を暗くし、いかに錦の上に暮していようと、決して錦には見えて来ないのであります。この愚痴の暗い心は、今、現に、日本国土に住む国民の心に巣く、様々な形で美しい国土を蹂躪しているのであります。

一。今、日本は未曾有の時機に遭遇しております。一線と銃後の差別なく、挙国一致、興亜の聖業に大精進大努力をいたすべき、千載一遇の時運に当っていることは言うまでもないことであります。この秋に当つて、いたずらに私利私欲に盲になつて、国家の興廃を念頭におかないものがあるとしたならば、国家的立場から言つても、また我ら仏教的立場から言つても、許すべからざることでもあります。しかれば一体、その国家に対する抽象的な生き方、国家によつて私心を満そうとする貪欲は、何によつて退治せられるのでありましょう。これすなわち国民が持つところの崇高なる教養、即ち宗教的教養に待たなければなりません。

一。世に言う人があります。我が輩らのごときは、すでに完全なる日本国民である。立派に日本国民としての義務を果している。あえて宗教などの必要を認めない。宗

教などは弱者の求むるものである。こうした声もかなり聞くようであります。これはまた何という冷淡な言葉でありましょう。世に体が健康であるが為に、ほとんど医師の御厄介にならずに過せる人があります。それだからと言って、一切の病院や、医師を無くすることは出来ません。恵まれたる一人を以て万人を規定することは出来ません。

いわんや精神界のこと、自らも現に五濁悪世にいつつ、自分のみ清しとし、正しとする独善的態度を、仏教においては、二乗といい、我と言って嫌うのであります。古の聖者たちは、世の濁れを自己において見、一切衆生の悪を己において見出して、その謙虚なる合掌の心を成就して生きました。しかしてその内に耕しつつ、内觀の世界において一切衆生の悪を自己において見出しつつ、自然の浄化聖化を受け取って生き生き方は、念仏行者においてもまた同一であります。

悪人として大地に合掌した方が、永遠の光として長く拜まれるに引き替えて、独り清しとする人が、その言とは反対に、その家族の人からさえ頼りとし拜まれてはいないという事実は、考えなくてはならぬことであります。独善、自ら清しとする無信仰な人と、悪逆の病患を自らにおいて見出し、大悲の自然の化育に、戦々競々として薄氷を踏むが如く、深淵に臨むが如く、行住坐臥、大法の示したもうが如く生きんとする者と、そのいづれが真に忠良の民でありましょうか。

一。何時、出勤せねばならぬかわからない雛鷺たちが集ると、生がどうの死後がどうのと、さかんに宗教に対する疑問が出て、友達同志では解決がつかず、それを親のところを書いてよこすのがあるそうです。もとより命はみ国に捧げています。しかし、それであればこそ、どうしようもない不安が押し寄せる。それを聞いて卑怯なとか、弱者だとか、無慈悲に言えるであろうか。私はそうは思わない。

一。いざ出征となれば、やれ千人針、やれお守り袋、と贈られる。もちろん渡してくれる人の親切はありがたく感ぜられるであります。しかし現に氏神の守札を持つたものが倒れてゆくのに、お守り札で安心している者が一人でもあるでしょうか。厳島神社のお守りだ、出雲大社のお札だ、と渡されても、それには何らの教えも道理もついていない。肯か^{うなず}れる教法のないものが何で力になろう。あれば万一の僥倖^{きやうしやう}をたのむ不安の一相にすぎますまい。そんなものを身につけないでも、大安住の一境にあつて、万死の中に活を見出す不動の大信を、成就することはできないのでありましょうか。

一。少年航空兵の義坊はその母に言いました。「飛行機に乗って段々空高く昇つてゆき、大きな建物も米粒くらいに見えるようになった時、私は子供の時お会いしたきりの住岡先生が思い出せてならない。」と。それを聞いた私は「義坊よ、今もまだ切れない私と君との間に渡されてある因縁の綱をたどつて、私のところに帰つて来い」と念じ続けていました。すると、ある時、思いがけなく義坊が私の書齋に現れてきた。私は嬉しかった。それから後、義坊は一日み法を聞き、わからぬところを審かに

し、合掌して涙と共に立上り、心からの微笑をもらして、「これで死なれます」と走ってゆきました。今は目ざましい活躍をしていることでありましょう。親もまた「安心してお国に捧げることが出来ます」と泣いて喜びました。

一。上御一人は、「億兆心ヲ一ニシテ」とお示し下さいました。これまことに日本精神の根幹をなすものであります。国体の精華であります。しかるに、我らの現実はどうでありましょうか。億兆一心どころか、一家族すら一心になつていないではないか。まことに不忠者であります。その不忠者はどこにいたのでありましょうか。

一。不忠者は私の魂の奥にいます、私は不幸にして今日まで、一応は御真影の前に頭を下げているはずの教育者にして、出会った時、真に頭の下がりきつていた人を一人として見る事が出来なかつた。形は下つても心が下らない。一応は下つても、再往ふたたびこれをただせば下つていない。下げないこの心、すなわち不忠であります。この心とは我が心であり、邪見傲慢であります。真宗では、自力といい、疑惑無明といひます。

一。そんな我がこそ自分で棄てればいいではないか、と言う人があります。それは、そんな不安なんか自分で捨てればいいではないかと、言うのと同じであります。精神界の法則も、自覚の原則も、哲理も知らぬ人の言であります。第一に、自分の為すことをよく見たらわかることでもあります。そんなに容易に我を捨てて、不滅の徳が成就せられるならば、古の聖者が二十年も三十年も苦しみ続けはしません。

8

一。仏教とは、読んで字の如く、仏の教えであります。仏とは覚者であります。自覚者の教えであります。また仏教とは、仏に成る教えであります。自覚者を成就する教えであります。正しい教法であります。しかして無我の自覚、無我の生活、無我の精神などと言われるがごとく、仏教と外道との差異は、ただ、我が無我がの一点にあります。もし「仏法は無我にてせうろう」との鉄則が生きていないならば、たとえ言葉は仏教の言葉を使つていたとて、仏法の行者ではないのであります。

一。無我とは、信心であります。無我とは、智慧であり、慈悲であります。自覚の極限であります。道であり、光であり、全我のよろこびであり、真の自利であり、真の利他であり、懺悔であり、慚愧であり、感謝であり、全我を打ち出した報謝の生活であり、滅私奉公であります。

かかる無我の大信は、阿弥陀（無量寿、無量光）仏の回向顕現、すなわち、涅槃の大我の回向によつて、小我の自力を粉碎してのみ、成就することであります。仏教とは真にこのことでもあります。

一。教えのみが人を造ります。教えのみが国力を増上充満せしめます。教えのみが心の糧であります。もし教えにして我であるならば、人もまた我であります。教えにして正なれば人もまた正であります。ただ教えのみが人を造ります。

仏教とは、実に日本が持つ最高の教えであり、人類最高の文化であります。ただ悲しいことは、仏教を知らずして仏教を語り、大邪見の心が得々として仏教に刃を向け、自らの我心に乗って、日本主義を唱えつつ、日本を損していることでもあります。